

(続紙 1)

京都大学	博士（経済学）	氏名	亀岡京子
論文題目	研究開発マネジメントにおける評価の役割		
（論文内容の要旨） 本研究は、医薬品の研究開発における「評価」が「選択」と相互作用を及ぼすことについて検討し、そのことが研究開発プロセス全体において果たしている役割を明らかにするものである。 製品開発プロセスを分析する既存研究では、プロセス全体を問題解決の束と捉えて、それらをいかに迅速に処理できるかが議論の対象となってきた。しかしながら、医薬品の開発では、問題解決モデルでいうところの問題空間を構成する要素が相互依存性を持ち、構造と機能の因果関係知識も必ずしも明らかにされていないため、試行錯誤で探索を進めることになるが、それでは局所解に陥りやすいという問題がある。 そこで、本論文では、このような条件下で探索を進めるプロセスについて、従来はあまり議論されることがなかった評価スキームの形成が探索の効率化に及ぼす影響について、まず検討している。実際にアルツハイマー病治療薬の研究開発事例を分析することによって、Gavetti and Levinthal (2000) で提示された認知的探索が現実的にどのような探索を意味するのかを検討した。その結果、多数の代替案を評価する段階で、アプリオリに実施される評価試験とは異なる、視点を変えた評価概念に基づいて評価実施計画を構築する評価スキームを作りこむことが有効であると分かった。 次に、選択と評価の相互作用を明らかにするために、高血圧症治療薬の研究開発事例を取り上げている。この事例から、非協調関係にある企業間でも選択と評価の相互作用が生じていることを明らかにしている。また、上記の事例と併せて、研究開発プロセス上流における探索には経路依存的ではない技術や情報を受け入れる必要があることが示唆されている。 さらに、三つ目の事例研究では評価の外部化の問題が取り上げられている。研究開発の上流とは異なり、臨床開発では探索活動よりも薬の有効性や安全性に重点がシフトしている。そこでの評価において、積極的にサプライヤーの経験やノウハウを活用できる企業とそうではない企業との違いが、研究開発パフォーマンスに影響を与えている可能性が示唆されている。特に評価業務に対する人的資源の活用を含む取り組みが異なり、そのことが評価業務を遂行する企業間の能力差として顕在化する可能性が示唆されている。 以上、この論文では、研究開発プロセスにおいて、評価とはアプリオリに与えられるものでもなければ単に合理的な基準として定まっているものでもなく、社会的に形成され、代替案の選択との相互作用から探索の精度や深さに影響を与えるものであることが示された。従来の研究開発マネジメントの議論を、評価の観点から光を当て、評価の作られ方が研究成果に影響を及ぼしている可能性を示している点に、この論文の貢献がある。			

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

研究開発マネジメントの主要な研究アプローチの一つである問題解決アプローチによる研究の流れにおいて、新しい概念化を目指したものである。従来の研究では、問題解決プロセスにおける探索と選択の関係について検討したものが多かったのに対し、この研究では従来論じられることが少なかった評価基準の形成過程や評価と探索との相互作用に焦点を当てている。医薬品産業における研究開発マネジメントを分析対象とした事例研究から、「評価スキームの作りこみ」や「研究成果の意図せざる引継ぎ」などの興味深い概念化を行っているが、これらの研究は研究開発マネジメントのメカニズム探求という観点から見て、十分な学問的貢献があり、優れた研究だと評価できる。

特に、本論文の第3章と第4章で展開された二つの事例分析それぞれの学術的貢献が大きい。第一の事例では、原因不明の病気の治療薬の研究開発について、曖昧な因果関係の下での探索という観点から考察し、科学知識を評価スキームに取り込んだ概念化とコード化が、結果として経験から逸脱した探索活動を可能にしたことを示している。研究開発マネジメントだけではなく、意思決定論の分野でも一定のインプリケーションを持つ可能性がある。第二の事例は、直接協力関係のない企業間の擬似的な研究成果の受け渡しを通じた創薬プロセスとそのメカニズムを取り上げており、非協調関係にある企業間でも互いの研究成果を参照しあうことで、選択と評価の相互作用が生じていることが示されている。なお、この事例研究のもとになった論文は、日本経営学会の『日本経営学会誌』に掲載され、2009年に当該学会の論文部門において学会賞を受賞している。

このように、この論文は、経営戦略や技術経営研究の流れを押さえた上で、まだ十分検討されてこなかった領域のメカニズムを質的研究で解明していこうという、非常に野心的な試みであるが、それゆえ、いくつか問題も残されている。

第一に、論文全体として取り上げられている事例を比較する理由が明確ではなく、論文全体における各事例の位置づけも十分議論されていない。何のために三つの事例を比較しているのか、比較から何が言えるのかについての検討が足りなかったため、論文全体としてのメッセージが不明確になってしまっている。

第二に、この論文の焦点である評価という概念が、それぞれの事例ごとに微妙に揺らいでおり、統一的な議論を構成するのが難しくなっている。評価の社会的構成という側面から議論するという方向性自体は評価できるものの、評価概念を論文として統一的に掘り下げる努力が不足しており、その試みは不完全なままに終わってしまっている。

第三に、事例研究の一つである評価の外部化の議論(第5章)については、実証研究としてはまだ不十分であり、この事例分析の結果をもとに論文全体の議論へつなげるためには、事例の記述と分析をより充実させる必要がある。

以上のような問題点はあるものの、これらは今後の課題というべきものであり、研究開発マネジメントにおける評価の意義とその形成過程について、興味深い事例を通じて明らかにしたこの論文の学術的価値を損なうものではない。よって本論文は博士(経済学)の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成23年2月9日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。